

# 教え 大女優への芸につながった

「日本の母」を演じた女優・森光子には、京都にもう1人の「母」がいた。茶道裏千家14代家元夫人の千嘉代子である。

森は、京都の鴨川沿いの料理旅館で生まれた。実の母は、森が13歳のときに結核で亡くなっている。その1年後、いとこの俳優・嵐寛寿郎を頼って役者の道へ入った。

戦時中は、旧満州(中国東北部)や南方を慰問で回った。戦後すぐに結核を患い、京都で療養していた。

嘉代子の髪結い(美容師)と森の母が懇意だったため、嘉代子が森を秘書に雇った。嘉代子の長男で、15代家元の玄室(94)は一戦後、森さんが来て、パツと花が咲いた。おちゃめさんで可愛らしく、話術も達者。頭がよかった」と振り返る。

森より三つ年下の玄室は特攻隊員だった。出撃命令の出る前に内地で敗戦を迎えた。「特攻の生き残り」として忸怩たる思いを抱えていた玄室に、森は「生きてらっしゃるから、お家を継げるのよ」と



森光子

1920〜2012年。放浪記のほか、「時間ですよ」「3時のあなた」などに出演。05年文化勲章、09年国民栄誉賞、京都市市民栄誉賞。

声をかけた。

裏千家には、日本文化を学ぶため、多くの進駐軍も訪れた。森も嘉代子を手伝い、将兵らにお茶を運んだ。ある晩、将兵が帰った後の夕食のとき、嘉代子が森に「歌って」と頼むと、森はジャズ「ビギン・ザ・ビギン」を英語で歌った。

森は嘉代子を「ママさん」と呼んだ。「早くに実の母を亡くしたから、母の温かさを求めたと思う」と玄室。嘉代子も森をかわいがり、着物の品のよい着こなし方や礼儀作法を教えた。

裏千家にいたのは2年あまり。その後、小説家の林芙美子の生涯を描いた舞台「放浪記」をはじめ、女優として映画やテレビで活躍した。

1980年、嘉代子が亡くなった。葬儀で遺影に語りかけた森の言葉は玄室は忘れられない。「ママさんは命の恩人。色々教えてもらったことが、しみじみとありがたく、こうして舞台に立たせてもらっている」

玄室は言う。「森さんは、うちの母を愛していた。母の教えが大女優への芸に役立った」

森は仕事の合間に京都に戻り、2人の「母」の墓参りを欠かさなかった。森のマネジャーだった渡辺治子(はなべ ぢこ)は「森の心には、いつも2人の『母』がいた。親に感謝しなさい」と周りの人に諭していた」と語る。

最後の舞台は、演出家ジャニー喜多川が森の半生から発



④裏千家の兜門=京都市上京区、滝沢美穂子撮影  
⑤1955年、千玄室さん(右から4人目)の結婚祝いに訪れた森光子さん(右から2人目)。その左隣が母と慕った千嘉代子さん=森光子芸能文化振興財団提供



想したショーだった。89歳の森は、京都の一座を率いる座長役で、祇園小唄を歌った。「京都で生まれたことを誇りに思い、最後は京都に帰ってきたんです」と渡辺は言う。その2年後の11月10日、森は旅立った。この日は森繁久弥と高倉健の命日でもある。

敬称略(岡田匠)